fct
# GAZETTE

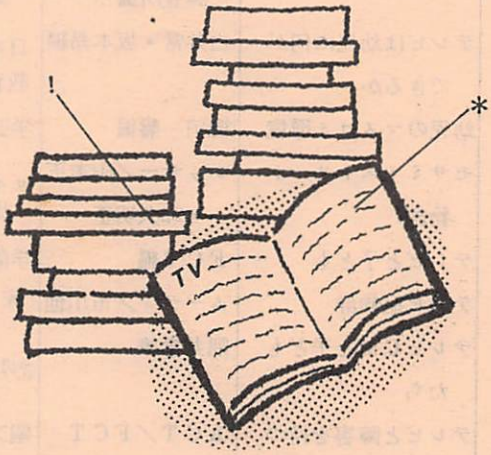
1985.11
vol. 5
Number.19

ガゼットは
テレビと市民
のデータバンクです

編集・発行／子どものテレビの会（ＦＣＴ）神奈川県葉山町長柄1601－27　責任者／鈴木みどり
銀行口座　第一勧業銀行逗子支店（普通預金口座 1425785）　郵便振替口座　東京9－84097
購読料／年間（４回発行）　￥1,500円（送料￥240）　一部￥400

■ ＦＣＴ創設８周年記念特集

## テレビを考えるための50冊の本




ＦＣＴはテレビの送り手、受け手、研究者が立場を超えて集い、英知と力を結集する市民のひろば＝フォーラムとして1977年10月に創設された。以来、ＦＣＴは視聴者、子どもの親、人間の側に立ってテレビのあり方を問い、定例のフォーラム（研究会）開催、テレビ診断週間の設定とその間のモニター調査及び内容分析調査の実施、調査報告書の刊行等の各種の活動によって、テレビに対する発言を続けてきた。この活動の積み重ねの中から「50冊の本」選考の構想は生まれた。人間がテレビを相手にする上で欠くことのできない基本的な知識とは何か。それを教えるのがここに選んだ50冊の本である。

視聴者にとってテレビは室内にある小さな四角い箱にすぎないが、この箱から間断なく流れ出る番組とＣＭ＝情報は、今日の人びとの生き方、社会や世界のあり方と深くかかわっている。本特集は、この関係をメディアあるいはテクノロジーとしてのテレビの側からではなく、人間の側から多面的に考えるものである。ＦＣＴでは、この本のリストが各地の市民活動、消費者活動、母親学級、あるいは大学生の卒論で活用され、テレビに対する説得力のある市民の発言が増えていくことを願っている。

■CONTENTS■

○特集　テレビを考えるための50冊の本……1
50冊リスト……2
選考経過……3
領域別50冊内容紹介……6
○ fct フォーラム記録
ＮＨＫはうけていますか？
― 若者志向!!の公共放送を考える……13
○ fct データバンク
海外篇……15

カット　市川雅美

# テレビを考えるための50冊の本リスト

| 書　名 | 著者,編者/訳者 | 出版社 |
|---|---|---|
| 現代マス・コミュニケーション論 | 竹内郁郎・児島和人編 | 有斐閣 |
| 現代マスコミ論 | 稲葉三千男 | 青木書店 |
| 知る権利 | 奥平　康弘 | 岩波書店 |
| アクセス権とは何か | 堀部　政男 | 岩波新書 |
| 消費者の権利 | 正田　彬 | 〃 |
| 幼児の生活とテレビ | NHK放送世論調査所編 | NHK出版協会 |
| テレビは幼児に何ができるか | 白井常・坂本昂編 | 日本放送教育協会 |
| 幼児のマスコミ環境 | 櫛田　磐編 | 学芸図書 |
| セサミ・ストリート物語 | レッサー/山本正・和久明正 | サイマル出版 |
| テレビと子ども | FCT編 | 学陽書房 |
| テレビ症候群 | ムーディ/市川他 | 家の光 |
| テレビCMと子どもたち | 隅井孝雄 | あゆみ出版 |
| テレビと障害を持つ子どもたち | ACT/FCT | 聖文舎 |
| 子どもはもういない | ポストマン/小柴 | 新樹社 |
| 放課後の子どもたち | 斎藤次郎 | 岩波書店 |
| 子供! | スタジオ・アヌー | 晶文社 |
| メディアに縛られた女 | ウェイベル/荒このみ | 時事通信社 |
| セクシー・ギャルの大研究 | 上野千鶴子 | 光文社カッパ |
| 女性ディレクターの現場 | 講談社編 | 講談社 |
| 講座女性学 1. 女のイメージ | 女性学研究会編 | 勁草書房 |
| 性の植民地 | バリー/田中和子 | 時事通信 |
| 幻影の時代 | ブーアスティン/星野・後藤 | 東京創元社 |
| テレフィッション | ベルジュ/江口 | 竹内書店 |
| テレビ　危険なメディア | マンダー/鈴木みどり | 時事通信 |
| メディアの牢獄 | 粉川哲夫 | 晶文社 |

| 書　名 | 著者,編者/訳者 | 出版社 |
|---|---|---|
| ニューメディアの幻想 | 丸山　尚 | 現代書館 |
| テレビの思想 | 佐藤忠男 | 千曲秀版 |
| 性　暴力　メディア | アイゼンク、ナイアス/岩脇三良 | 新曜社 |
| 日本のテレビ文化 | 北村日出夫・中野収 | 有斐閣 |
| 消費社会の広告と音楽 | 林進・小川・吉井 | 〃 |
| マスコミの明日を問う 1.放送、2.出版、3.新聞 | 研究集団・コミュニケーション'90 | 大月書店 |
| 放送業界 | 野崎・東山・篠原 | 教育社 |
| 民放連放送基準解説書 | 日本民間放送連盟 | コーケン |
| 視聴率の正体 | ビデオリサーチ編 | 廣松書店 |
| 現代社会の広告 | ロッツェル、ハフナー他/小林保彦 | 東洋経済新報社 |
| テレビCMの広告効果 | JNNデータバンク編 | 誠文堂新光社 |
| 広告規制の研究 | 内田耕作 | 成文堂 |
| やむをえぬ事情により | フレンドリー/岡本 | 早川書房 |
| メディアの権力1～3 | ハルバースタム/筑紫・東郷 | サイマル出版会 |
| アメリカジャーナリズム報告 | 立花　隆 | 文春文庫 |
| ドキュメント・放送 戦後史Ⅰ～Ⅱ | 松田　浩 | 双柿舎 |
| テレビ視聴の30年 | NHK放送世論調査所編 | NHK出版協会 |
| 放送50年史 | NHK編 | 〃 |
| 放送制度1～3 | 伊藤正巳編 | 〃 |
| 人間復興の経済 | シューマッハー/斉藤志郎 | 佑学社 |
| これからどうする社会とくらし | 使い捨て時代を考える会編 | 柏樹社 |
| 生命系の危機 | 綿貫礼子 | アンヴィェル社 |
| ジャンクフード | ファザール/日本消費者連盟 | 学陽書房 |
| 戦争中の暮しの記録 | 暮しの手帖編 | 同社 |
| 苦界浄土　わが水俣病 | 石牟礼道子 | 講談社 |

## 選考経過

### 読みやすい本ばかりではなく…

――非常に広い分野にわたる書名があがってきましたので、選考委員の方々もとまどわれたのではないかと思いますが、よろしくお願い致します。

各委員推せんの本を集計している間に、リストの中にあがっている雑誌、定期刊行物について検討して頂きたいと思います。推せん依頼の文中には書店で買える本という条件だけをつけました。

「放送レポート」「マスコミ市民」が挙げられていますが、どういう扱いにしましょうか。

B　とりあえずは除くということで別の機会にそういうのをまとめてやったらどうでしょう？

F　賛成です。それだとこの「放送関係文献総目録」や「NHK放送文化調査研究年報」も定期刊行です。

G「銃後史ノート」(女性の現代を問う会編)もです。

――それではこれらの本は一応除いて、おおよその各分野ごとにみなさまから推せんしていただいた本を検討していきたいと思います。

A　その前にちょっと。先程出来るならば比較的新しい本、そして読みやすい本を、というＦＣＴからの要望がありました。それはいいんですが、学生なんかが使いやすい基礎的なことをきちっとおさえてある本、それと少しは骨っぽい本もいれてほしいと思います。

E　ぜひそのようにお願いします。

――それでは、基本的な本といいますか、骨っぽいところから、票の多い本を見ていきますと…「放送50年史」「テレビ視聴の30年」いずれもＮＨＫの編ですが、これは２冊とも必要ですか。

F　50年の方はデカくて高い本ですがちゃんとした本ですからぜひいれてほしい。

A　30年の方はデータブックとしてハンディで重宝な本です。

E　学生が卒論を書く時にはやはりこの２冊が便利だと思います。

F　この２冊はまあ体制的な方だからこれに対するものとして「ドキュメント放送戦後史」はいいんじゃないですか。

――会員からの票数も多いし評価の高い本です。

F　それに「放送制度」が加わると層が厚くなる。

B　ＦＣＴの立場としてはこの「民放連放送基準解説書」も通したいですね。

D　いいと思います。骨っぽいし……(笑い)

B「視聴率の正体」も他にない本なのでぜひ。

――基本的な知識を得る本はこんなところで、次にメディア論、マスコミ論といったところで票がまとまっているのは……

### なぜアメリカの本が多いか？

G「アクセス権とは何か」「現代マスコミニュケーション論」「現代マスコミ論」「知る権利」「消費者の権利」はいずれも古典的名著といった処ですね。

A　同じ著者の「表現の自由とはなにか」も出ていますがやはり「知る権利」の方が最新の本ですし…

G「メディア・権力・市民」の編者の考え方を知るには「現代マスコミ論」の方がいいようです。

A　入門書的な「放送業界」「広告業界」はセットで入れるといいでしょう。

F「メディアの権力」３冊で読みでがありますが面白いのですいすい読めます。

D「幻影の時代」も少し古いけれど…

F　次作の「過剰化社会」よりずっと独創的ですし古くてもいいものはいい、と。

――「テクノストレス」(Ｃ・ブロード、新潮社)は会員から２票ですが？

E　時流にのったというだけじゃないですか。

A「メディアの支配者」(バグディキア、光文社)近刊本ですがこの手の本はもういいですね。

G「やむをえぬ事情により」も古いけどぜひ…

G「テレフィッション」はフランスの研究者が書いた本です。アメリカの本に片寄らないためにも。

――そういえば日本人によるこの手の本がない。

G　知的レベルの層の厚さの違いなのでは(笑い)

E　そういう日米の対比という意味で「アメリカジャーナリズム報告」を推します。好みの差はあるでしょうが、広告、新聞についてきちっと書いてありますので、学生にも教科書としています。

A　推せんの言葉に迫力あり、入れましょう(笑い)

D　私は「ニューメディアの幻想」を推しましたがこれは住民運動の立場からミニコミを大切にしようという発想で書かれたユニークな本です。

A　いいですね、これは。

F「メディアの牢獄」は同じ著者の「ニューメディアの逆説」の方がいいのではありませんか。

B　よく読まれているのは前の方ですね。

――どちらをとりましょうか。

F　FCTスタッフに読みくらべて頂いて(笑い)

――わかりました。この決定はこちらで。

「マスコミの明日を考える」は3冊まとめてシリーズで、「性　暴力　メディア」「日本のテレビ文化」「テレビの思想」「テレビ危険なメディア」と、いずれも会員と選考委員の票が入っていますが、異議ありませんか。

A「テレビの思想」の著者は他にも多くのテレビについての著作がありますがこれでいいですか？

――告発的な著書が多いのであがってこなかったのではないでしょうか。

A　彼のテレビ評は買いますが……

B　このままでいいのじゃないですか。

E「消費社会の広告と音楽」は後にもっといい本が出るのを期待して。この種の本は今これ一冊しかない。ユニークな視点の面白い本です。

A「広告規制の研究」も法的な立場で書いた唯一の本なのですが、専門的すぎますか？

E　そんなことはないと思います。これと関連して「現代社会の広告」は企業のマーケティングの側面から広告をとらえたこれも他にない本です。それに「テレビCMの広告効果」今の広告に少し当てはまらないところもあるけれど、それを承知でぜひ読んでほしい。

A「経済成長と広告倫理」(ギャレット、千倉書房)という珍しい本がありまして、ローマ法皇庁につとめる著者の一冊だけの本なのですが……

G　そこまでいくと少し専門的すぎるのでは。

――テレビCMの方をいれ、経済成長の方は前に出た現代社会に代表してもらうということでは。

A　けっこうです。現代社会は広告業界でとてもよく読まれているパンチのきいた本ですから。

E「広告解体新書」(末次静二編、風濤社)を落すのは残念な気がします。広告界の実態がわかる本です。

G　広告関係の本が少し多すぎる気もしますが。

――では最後まで通してみてあらためて考えることにしたいと思います。

## 〝厳選〟された子どもとテレビの本

子どもとテレビの関係では9冊に票が入っていますが、いかがでしょう。

B　いちおう万遍なくあがっているのではないでしょうか。これに加えるとすれば……

――会員から推せんされている本で「子どもの中のテレビ」(小島明共著、国土社)は？

A　万遍なくいろんな問題が入っているとは思いますが…これ以上、必要ないのでは。

B「子どものテレビどうする」(石子順、啓隆閣)も出た時はよかったのですが……少し古い。

D「テレビに子守りをさせないで」も評判になった本ですね。

B　題がうまいけれど今は評価が低いと思います。

――「テレビ」(稲村・小川編、共立出版)もハンディな本ですが……

B　こういうのをいれるより最近出た「子供！」の方が意味があるんじゃないでしょうか。

――私たちも「子供！」は面白いと思いました。よろしければ、では、これをとります。

G「子ども新時代」はいかがですか。

F　朝日の連載コラムですね。お子さまランチみたいに何でも書いてあるけれど(笑い)まあいれなくていいでしょう。

F「子どもたちの現在」は同じ著者の「放課後の子どもたち」の方がいいと思うけれど。

B　それはFCTに両方読んで貰ってまかせると…

――はい、ではまかせて頂きます。

G「テレビ症候群」は会員からの推せんもありますし、いれてもいいと思いますが。

B　いれたらいいと思います。

――では、こんなところで子ども関係は11冊になりました。かなりしぼり込んだ感じですね……

子どもについて考える時母親、女性問題を無視出来ないというのが私たちの視点でもあるのですが、このあたりの本で5冊あげられています。

E　セクシーギャルはコマーシャリズムを批判しながらそれに乗っている感じで、気になります。

G　他にも「広告の中の女たち」（島森路子、大和書房）「テレビドラマの女性学」（村松泰子、創拓社）「主夫と生活」（M・マグレディ・伊丹訳、学陽書房）なども会員の推せんに入っています。

F「女性と天皇制」（加藤実紀代編、思想の科学社）「フェミニズムの宇宙」（青木やよひ編、新評論）とひろげだしたらきりがない気もします。

C　女性ということであんまりここだけ特別にあげるのもちょっと気になる感じがします。

――ではさりげなく、でもＦＣＴという主張をこめて５冊をすべりこませるということで…(笑い)

## 人間と社会を考える大切な本

先程から何度もあげられていた本でどうもうまくはまらなかった本が何冊かありました。生活に深くかかわったいい内容の本だけど、直接はテレビにむすびつかないというのはどうしましょう？「戦争中の暮しの記録」「ジャンクフード」「複合汚染」(有吉佐和子、新潮社)、「通史足尾鉱毒事件」(東海・菅井、新曜社)「人間復興の経済」「苦海浄土」「創造を組識する」(村木良彦、筑摩書房)「テレビの中の外国文化」（川竹和夫、日本放送出版協会）

D　日本の公害問題の基本として足尾の記録をいれるのはＦＣＴらしい選択という気がしまして…

F　複合汚染とあわせて公害と女性問題の視点をとりいれた「生命系の危機」に代表させては…

G　広く現代社会の問題を考えるきっかけになる本というとらえ方で別枠のようにして前にあがった「これからどうする社会とくらし」を加えた6冊にしたらいかがでしょう？

D　やはり暮らしという視点は広い意味でテレビに関わってくると思いますので大切に考えたいということでいいのではないでしょうか。

――それではこんなところで50冊。何冊かＦＣＴに一任というのがありますが、一応のバランスがとれたリストが出来たように思えますが……

G　こうやってみると作り手の方たちからいい本が出ていないですね。

F　そんないい本が出来るようならテレビの内容ももっとよくなるんじゃないですか(笑い)

G　この50冊を読むとテレビについてはたいへんな勉強をしたことになりますね。

――基本的な本、骨っぽい本、読みやすい本、送り手を知るための本、一応バランスがとれたようです。長い時間ありがとうございました。

◇　　◇

• 7月末ＦＣＴ会員の中から研究者、送り手、市民活動の実践をしている50余名の方々にアンケート用紙を郵送。ガゼット19号の企画について１人5冊くらいの本の推せんを依頼した。

• 8月中旬アンケート用紙28枚の回収を得て推せんされた本100冊余のリストを作製。

• 8月末選考委員会に向けてスタッフは手分けをして入手可能な本は買い求め、残りは図書館で探して候補にあがった本の内容把握につとめた。

選考会当日、会場は飯田橋婦人情報センター。

会員の中から各専門分野の方々にお願いした選考委員は猛暑の中を汗をふきふき参加して下さった。会場に積みあげた本70冊余りを手にとりながらの討議約4時間、以上のような経過で50冊の本の選考が行われた。当日参加して下さったのは、久世了さん(明治学院大学、広告倫理学)、無藤隆さん(聖心女子大学、発達心理学)、G・オルソンさん（マスメディア研究所）、安藤栄雄さん（日本消費者連盟）、小林保彦さん(青山学院大学、広告論)、石川旺さん(NHK文研、ジャーナリズム論)、鈴木みどり(FCT)の各氏。

• アンケートであがった書名と推せん者の票数を記入したリストをあらかじめ選考委員に郵送し、当日各委員が10冊の本をあらたに推せんした上で票数の多いものから検討を加えて決定していくという方法で選考会をすすめた。

• 選考経過は以上の通りで、多くの本について検討が行われたが誌面の都合で一部しか紹介できなかった。　（進行とまとめ　竹内希衣子）

# 領域別50冊内容紹介

## マスコミ論・人権

●現代マス・コミュニケーション論、竹内郁郎・児島和人編、有斐閣、1982年、¥3700。

現代社会におけるマスコミュニケーションの総体的理解はテレビを考える上で欠かせない。本書はマスコミュニケーション成立の歴史的概観に続き、マスメディア産業、組織、内容という内的構造を解明し、次いでマスコミュニケーションと社会の関りを政治過程、知る権利・アクセス権、政策、経済生活、地域社会、災害情報、教育、現代文化の各領域で論じ、総体的把握を可能にする。

●現代マスコミ論、稲葉三千男、青木書店、1976年、¥1400。

マルクス主義の立場からのマスコミ論で5部構成。①マスコミ論の基礎で、マスコミを「矛盾」の運動と捉える著者の姿勢が明らかにされ、②送り手で、組織と人間、放送の自由を論じる。③広告と電波料で、マスコミの経済的基盤を、④ジャーナリズムでは、内容の分析を中心に、⑤受け手はマス・オーディアンスの特性、人気の社会学を論じる。前著「現代コミュニケーションの理論」(同社)に比べ著者の人柄を伝える時評的論文が多い。

●知る権利、奥平康弘、岩波書店、1979年、¥1600。

知る権利の中核は国政にかんする情報を国民が請求する権利にある。この権利は憲法の原則や諸規定から当然に帰結されるにもかかわらず、日本では実定法律上の制度となっていない。著者は日本でのあるべき立法展望のため米国の情報の自由に関する法律、サンシャイン法の立法過程や判例を紹介し、知る権利が国民一人ひとりの表現の自由、プライヴァシーの権利と表裏一体をなすものであること、また、知る権利の充足のためには諸メディアの報道の自由が不可欠であることを明らかにする。

●アクセス権とは何か—マス・メディアと言論の自由—、堀部政男、岩波新書、1978年、¥430。

アクセス権とは何か、その歴史、現状、今後について豊富な事例を示しつつ解説する。アクセス権の理解に加え、その基底をなす市民意識、マスコミの実態についても広く学べる。①マス・メディアの機能と操作、②アクセス権の生成と展開、③アクセス権運動、④アクセス権の類型、⑤アクセス権の今後。

●消費者の権利、正田彬、岩波新書、1972年、¥430。

資本主義経済の高度化につれ、消費者の生命・健康の権利、取引条件の決定に参加する権利はさまざまな形で侵害されている。食品衛生法、危険表示法、不当景品類及び不当表示防止法(景表法)の運用では業者の利益が優先され、また独禁法は価格カルテル、企業合併、再販制で多くの適用除外を認めている。消費者は取引主体としての人間の権利を自覚し、従属的地位からの脱却をめざす運動を進めるべきと、豊富な事例を示しつつ説く。

## テレビと子ども

●幼児の生活とテレビ、NHK放送世論調査所編、日本放送出版協会、1981年、¥2100。

テレビを見はじめる年齢、1日の視聴時間、長く見る子、短い子、よく見ている番組、食事時のテレビ視聴、母親と幼児とテレビ、テレビの影響について…1979、80年と2回にわたって東京、大阪、秋田県の幼児を持つ母親を対象とした視聴実態調査の実施結果のまとめである。幼児の生活時間、行動内容とテレビとのかかわり、母親の意識など幼児の発育過程で見過せないデータに満ちている。

●テレビは幼児に何が出来るか、白井常・坂元昂編、日本放送教育協会、1982年、¥1900。

テレビ視聴の低年齢化に伴って2歳児向けの番組の開発を目標としテレビの制作者と発達心理学者から成るプロジェクトチームが行った番組つくりの過程を報告したもの。アメリカの人気番組セサミストリートを手本にして実際に幼児を対象としたさまざまな測定結果から2歳児向けの幼児番組「ハイ・ポーズ」が開発されNHKの「おかあさんと一緒」に組みこまれ放映されることになった。

●幼児のマスコミ環境—何をえらび出すか、櫛田

磐編、学芸図書、1983年、¥2000。

幼児や小学校低学年の子どもたちをターゲットにするマス・メディアの内容と仕掛けの実態を調査。現代日本の児童文化の特徴ともいえるキャラクター文化は、テレビ・映画・漫画雑誌などの一次メディアから、玩具・食品・飲料・生活用品などの二次メディアにまで至るが、これを詳しく分析する。またメディア教育など市民の側からの対応を説く章もある。執筆グループには現役の幼稚園教師多数が参加している。

●セサミ・ストリート物語、G・レッサー、山本正・和久明生訳、サイマル出版、1976年、¥1200。

世界中の子どもたちに見られている幼児向けテレビ番組セサミの制作に中心的役割を果してきた著者が、発達心理学からの学問的意味付け、子どもの捉え方、番組の制作過程を克明につづっている。セサミは教育専門家、調査研究員、テレビ・プロデューサーが対等に組んで創りあげた一大実験研究プロジェクトでもあった。教え、啓発し、元気づけることがなければテレビは単なる光の箱にすぎない、と結ぶ。

●テレビと子ども、ＦＣＴ子どものテレビの会編、学陽書房、1981年、¥1300。

子どもの日常生活におけるテレビ情況を整理し（1章）、公共の電波であるテレビにアクセスする市民の会ＦＣＴの誕生、創設理念と市民意識による組織の運営の難かしさと可能性の記述（２章）に続き、ＦＣＴの分析調査で明らかになったテレビの実態を報告し、視聴者の立場でテレビをどう見るか、そのチェックポイントも示す。最終章ではＦＣＴ活動の未来への展望が語られている。

●テレビ症候群、ケイト・ムーディ、市川孝一監訳、北濃秋子訳、家の光協会、1982年、¥1500。

テレビの習慣的視聴は、子どもたちにどんな影響を累積し、それについてどんな対策を講じることが可能かつ必要か？心理的影響のみならず、脳波、眼球、手足の運動や極超短波などの身体に及ぼす影響についても、最新の科学的研究に基づき平易に述べている。家庭、学校、社会における対策にもかなりの章を割き、生活者、市民の立場から具体的提案を掲げている。

●テレビＣＭと子どもたち、隅井孝雄、1981年、あゆみ出版、¥980。

子ども向けテレビＣＭの改善を求める市民の動きを受けて、送り手の側にいる筆者が共闘の姿勢で執筆している。子どものＣＭはこれでよいのか（2部）ではＦＣＴの分析と提言、テレビＣＭ連絡会の要望を紹介し、コマーシャルの仕組みと経済効率を考える（3部）では、作り手でないとわからないテレビ内部の機構を解き明す。諸外国の子どもＣＭ基準の厳しい内容も紹介し、日本でのＣＭの今後を展望する。

●テレビと障害をもつ子どもたち、ＡＣＴ、ＦＣＴ子どものテレビの会訳、1981年、聖文舎、¥2800。

健常児と障害児を共に教育する統合教育の領域で米国ではテレビも重い責任が期待されている。障害児を知恵遅れ、視聴覚障害の他、情緒不安定や入院中など多様な子どもと捉え、それぞれに異なるニーズを説き、それらのニーズに応えて、障害児を肯定的に描く数々のＴＶ番組が紹介されている。９章25節より成り、各番組制作者、ライター、研究者、出演者等が熱意をこめて書いている。

●子どもはもういない、ニール・ポストマン、小柴一訳、新樹社、1985年、¥2000。

1850〜1950年の100年間を子ども期の絶頂期とすると、それ以降の現代社会にあって、子ども期は急速に消滅しつつある。子ども期の消滅はテレビのＣＭや番組内容、さまざまな社会的現象を見れば明らかである。子どもが性の対象としてＣＭやポルノに登場する例などを挙げ、子どもたちの無邪気さ、好気心、魅力が退化し、“大人・子ども”が増えていく情況に警告を発している。

●放課後の子どもたち、斎藤次郎、岩波書店、1983年、¥950。

消費文化の中で生きる今日の子どもたちは放課後の時間をどこで、どう過しているのか。著者は塾、児童館、少年野球、地域文庫、お店などを訪ね歩き、それぞれの領域で大人による一方的な管理ではなく、子どもの「遊ぶ生活」を保障しようとがんばっている人たちに出会い、彼らの実践を報告する。消費文化や管理づくめの生活から子ど

もの心を解放するために大人にできることは何か。それを語るのが本書である。

●子供！　スタジオ・アヌー編、晶文社、1985年¥2900。

子どもたちが語る大人のための本、とサブタイトルのついたこの本は、50人の大人が10カ月がかりで日本の各地の10歳〜15歳の子ども174名にインタビューを行ってまとめたものである。学校のこと、友だちのこと、家族のこと、などはじめはとまどいつつ次第にひきこまれて自分のことばで話している子どもたちの卒直さがそのまま読む者に伝わってきて800頁余りが一気に読了できる。

## メディアと女性

●メディアに縛られた女、キャスリン・ウェイベル、荒このみ訳、晶文社、1985年、¥1900。

原題は鏡 ― 大衆文化に表れた女性のイメージ。小説、テレビ、映画、婦人雑誌と雑誌広告、ファッションの五分野にわたって、具体的な事例と平易な文章で女性像が分析されている。そこに見られるのは19世紀以降繰り返されてきた主婦らしく、控え目で、健全で、かわいらしいアメリカ女性の姿である。大衆文化を支配する男たちが作りあげた、利益のあがる、最も都合の良い女性像である。

●セクシィ・ギャルの大研究、上野千鶴子、光文社カッパブックス、1980年、¥690。

アメリカの社会学者ゴフマンの方法を応用し、日本の雑誌広告写真に描かれる女性の「しぐさの文法」を解き明かす。女のセクシー・イメージ＝性的メッセージの分析が内容の中心。副題 ― 女の読み方・読まれ方・読ませ方、からもわかるように、この文法をうまく利用することを勧めている。女性問題の視点というより、客観的、現状肯定的姿勢が強い。

●女性ディレクターの現場、講談社編、講談社、1985年、¥1200。

ラジオからテレビ、カラー化、衛星放送、文字放送とめまぐるしく技術革新を続けてきた放送ジャーナリズムの中で活躍する女性ディレクターたちの働く者として、女性としての歴史、情熱、喜びと苦しみ、又、母親として、妻としての姿をインタビュー、レポート、座談会等で浮き彫りにする。登場するのは岡本由紀子（ＮＨＫドラマ部）吉永春子（ＴＢＳ社会情報局）、鎌内啓子（文化放送制作部）、せんぼんよしこ（日本テレビ制作局）、荻野麻耶子（毎日放送報道局）等。

●講座女性学１．女のイメージ、女性学研究会編、勁草書房、1984年、¥1900。

10人の女性研究者による論文を①女たちはどう見られているか、②女たちとその時代の２部に分けて収録。井上輝子は「マスコミと女性の現代」で1970年以降の女性雑誌を分析し、美容とファッション、雑誌全体の広告化という二つの顕著な傾向を見い出し、そこに消費社会に強固に組み込まれた女性たちの姿をみる。他の論文では女性の現状を学校教育（野木真代他）、法律（大脇雅子）、習俗（亀田温子）、母性（天野正子）等の多領域からのアプローチにより解明する。

●性の植民地、キャスリン・バリー、田中和子訳時事通信社、1984年、¥1800。

各種の文学、映画、メディアの表現の中にポルノグラフィーの文化的サディズムが溢れている。ポルノグラフィーにおいては、女性は性の商品としてのみ具象化され、男性は攻撃者として具象化されている。ポルノグラフィーに並び、人身売買、強制売春、家庭内での夫のレイプ、近親相姦、強制隔離結婚、これら全てが、家父長制権力と男性支配のなせる性的奴隷制であると述べている。

## テレビ環境論・テレビ文化

●幻影の時代、D.J.ブーアスティン、星野郁美・後藤和彦訳、東京創元社、1964年、¥1500。

マスコミが造り出す幻影＝イメージの氾濫する1940〜60年代のアメリカ社会を数々の実例によって解明し、ニュースは疑似イベント、英雄はマスコミの有名人、その他のあらゆる経験が人工的なものでしかなくなっている人びとの情況に警告を発している。広告によって作られる欲望や好み、それらを理想として追い求める個人や社会の姿など、今日の日本の情況に驚くほど近似している。

●テレフィッション、ルネ・ベルジェ、江口真治訳、竹内書店新社、1980年、¥1800。

ここ30年の間にテレビは、大衆の無意識と欲望を表現してくれる格好の道具として爆発的に人間の生活にかかわって来た。しかし、その一方通行的コミュニケーションは、私たちの環境のみならず頭脳の双方をつくり変えているのではなかろうか。少しでも早くメディア環境をコントロールできる方法が見い出されることが必要だ。フランスの研究者によるテレビ環境論である。

●テレビ　危険なメディア、ジェリー・マンダー、鈴木みどり訳、時事通信社、1985年、¥1800。

エコロジストの立場から、テレビは人間と環境を造り変え、オーウェルの「1984年」やソ連のSF映画「惑星ソラリス」で描かれるような専制的現実を作り出していると警告を発している。テレビは人間の感覚を剝奪し、催眠と睡眠教育の機能を果していると説き、神経生理学者による数々の研究データを示す。さらに、有能な広告マンとしての経験から、テレビをめぐる問題はことごとくこのテクノロジーに固有の特性に由来するとして、その特性を解明し、テレビは使い方次第で良くも悪くもなるという一般的な“中立”認識を幻想にすぎないと、否定する。

●メディアの牢獄、粉川哲夫、晶文社、1982年、¥1300。

副題はコンピューター社会に未来はあるか。精神療法としてのテレビ、大衆文化のパラドックス、マスメディア時代の家族と個人、パーフォーマンスの現象学、企業はなぜ“文化”をつくらねばならないか？等の時評を通して、コンピューター化された新しい官僚制社会の出現を明らかにし、その病理を分析、批判する。またイタリアのアウトノミア（自律、自治）運動の展開を追う中で、テクノロジーによる支配からの離脱の糸口を探る。

●ニューメディアの幻想、丸山尚、現代書館、1985年、¥1400。

日本のニューメディア事情をみると、エレクトロニクス技術の開発が一部企業の経済的要求と結びついて発展しつつある。この情況を批判するために書かれた本。著者によればニューメディア社会になると、日常生活に役立たない情報が商品化され利用者に金銭的負担が生じる。更に個人・地域・国家間の情報格差の問題、情報のネットワーク化による人権侵害の懸念、管理社会化傾向等をあげている。結論としては、自分に必要な情報は自分で作り、必要なメディアは自分で持つ事が安全で賢明と述べ、各種のミニコミ誌を紹介する。

●テレビの思想　1960年代～1970年代、佐藤忠男、千曲秀版社、1978年、¥1950。

テレビ表現の特質、コミュニケーションの歴史の中でのテレビの位置、時々の番組批評など31論文と時評を収録。60～70年代のテレビをみる著者の鋭い視点は今日でも新鮮で、「知る」ということの章で、「幻影の時代」の映像警戒説には価値を認めながらも反論を加えている。低俗番組とは何かの章で、暴力表現については、回数や残酷性の度合を問題にするより、むしろ暴力の思想を問題にすべきだと説く。

●性　暴力　メディア、H.J.アイゼンク・D.K.B.ナイアス、岩脇三良訳、新曜社、1982年、¥2800。

マスメディアにあふれる暴力とセックス描写は視聴者の態度と行動に影響を与える。これが今日まで繰り返えされてきた論争と数々の研究データを検証した末での本書の結論。論争に入り込んでいる政治的・商業的思惑、専門違いの研究者による間違った解釈を鋭く指摘し、最後に、テレビ暴力やポルノを規制するための具体策を勧告として提出する。著者は共に英国の心理学者。

●日本のテレビ文化、北村日出夫・中野収編、有斐閣、1983年、¥1400。

日本のテレビ状況を肯定する視点で書かれたテレビ文化論。テレビメディアの特性と日本人とのかかわりを、ラジオ・雑誌等の他メディアとの比較をまじえ、テレビ世代の情況を中心に述べる。①テレビの社会史、②ラジオ体験からテレビ体験へ、③生活空間のテレビ、④テレビ人間とは何か、⑤テレビを読む、⑥風俗現象としてのテレビ、⑦テレビと日本文化。「視聴者も気晴しにチャンネルをせわしく替えながら結構楽しんでいる」と述べる等テレビ文化への批判は少ない。

●消費社会の広告と音楽、林進・小川博司・吉井篤子、有斐閣、1984年、¥1600。

ＣＭのイメージソングにみられるように、広告音楽と大衆音楽の相互依存関係が強まっている。この現象は、消費社会における企業と文化の相互浸透、消費者の意識変化による企業の文化戦略といえる。①広告音楽の展開、②現代の音楽文化、③消費社会の文化の３章から成る。広告音楽史年表、イメージソング・リストも掲載。

## メディア産業・広告・ジャーナリズム

●マスコミの明日を問う1.放送、研究集団・コミュニケーション'90編、大月書店、1985年、¥1700。

テレビ・ラジオの実態を現場で働く者の眼でレポートし、問題の所在を探る。①当世放送事情、②荒廃すすむ制作現場、③政治とテレビ報道、④ＣＭ、スポンサーと視聴者、⑤放送局・ネットワーク解剖の５章とエピローグ。ブラウン管の内側を知るのに役立つ実証的データ、証言を豊富に織り込んでいる。同シリーズに2.出版、3.新聞、4.変貌するマスメディアがある。

●放送業界、野崎茂・東山禎之・篠原俊行、教育社新書、1983年、¥880。

日本民間放送連盟放送研究所の立場から産業としての放送界を概観し、放送制度、政策、産業組織、経営の動向と課題、番組と視聴者、放送広告の現況と課題、ＮＨＫの動向などの実態を示す。今後の課題、障壁として①考えられる経営圧迫（低成長、多局化、衛星放送）②多局化による民放産業の関係構造の変化、③ニューメディア競争を上げている。「広告業界」との併読を勧めたい。

●民放連　放送基準解説書1985、日本民間放送連盟、コーケン出版、1985年、¥1100。

この放送基準は、民放共通の自主的倫理基準として、昭和26年民放発足と同時に制定され、以降改正を重ねて今日に至ったもの。前文と18章143条に及ぶ条項からなる。前半83か条は人権、法と政治、児童青少年、報道、暴力、性その他表現上の問題について、後半60か条は広告の取り扱いについて、事例をあげ解説している。放送内容を視聴者の立場で監視する際、活用したい本。

●視聴率の正体、ビデオリサーチ編、廣松書店、1983年、¥1500。

視聴率とは何なのか、視聴率をよく理解することでテレビのどんなことがわかるのかを調査会社であるビデオリサーチがまとめている。視聴率が走る、視聴率の調べ方、視聴率から考える、視聴率からテレビをみる、視聴率は走り続けるかの目次で図表を多く用いて説明している。情報化社会の中での調査や視聴率の読みとり方の重要性、質の調査の必要性も指摘して、視聴率の限界を明らかにしている点を見落さないようにしたい。

●現代社会の広告、ロッツェル、ハフナー、サンデージ共著、小林保彦訳、東洋経済新報社、1980年、¥2400。

広告の理解には「市場」の理解が不可欠として古典的自由市場論及び新自由主義市場論を紹介・解説する。また広告は市場という制度の中の一つの制度であるとする立場からキャレー、ノリス、ポッター、サンデージの四つの広告論を紹介する（第１部）。第２部では広告と企業、個人、経済、コンシューマリズム、報道といった現実の諸問題を考察し、第３部で将来の広告のあり方を展望する。

●テレビＣＭの広告効果、ＪＮＮデータバンク編、誠文堂新光社、1981年、¥2700。

ＪＮＮデータバンクはＴＢＳをキー局とするＪＮＮ系列25社の参加する総合リサーチシステム。広告効果やＣＭタレントの分析、またフィールド調査、実験調査等の結果を詳細に図表で示している。①放送広告の現状、②スポット広告の効果メカニズム、③放送広告の諸問題、④スポットキャンペーンの効果事例、⑤放送広告の理論、⑥ラジオ広告の理論と実際。効果的テレビＣＭの打ち方がきめ細かく書かれた企業向けの本であるだけに、視聴者として活用できる点も多々ある。

●広告規制の研究、内田耕作、成文堂、1982年、¥4500。

アメリカの連邦取引委員会（ＦＴＣ）は1914年以来消費者保護機能を拡充しつつ60年の歴史をたどってきた。本書はＦＴＣの広告規制法の歴史的展

開、消費者保護命令や不実証広告規制の成立過程、運用、事例研究、法理検討を行う中で、日本の公正取引委員会の諸規制、たとえば不当表示規制のあり方や運用に多くの示唆を与えている。著者は香川大学の新進法学者。

●やむをえぬ事情により…、フレッド・フレドリー、岡本幸雄訳、早川書房、1969年、¥650。

ＣＢＳニュース部門元社長が放送ジャーナリズムについて書いた回想録。テレビのあるべき姿を豊かな経験から訴える。自らプロデュースした「シー・イット・ナウ」「ＣＢＳレポート」取材の経過（マッカーシー上院議員との対決、ケネディ大統領インタビュー等）、スポンサーとの交渉、イコール・タイム制度の事、仕事仲間のＥ・Ｒ・マローの事等。66年ベトナム戦争の聴聞会の中継をめぐり商業主義に徹する幹部に辞表を出した著者は退社後、公共放送開始に全力をそそぐ。

●メディアの権力1、2、3、ハルバースタム、筑紫・東郷訳、サイマル出版会、1983年、各¥1600。

アメリカのメディアはどのようなプロセスを経てだれによって今日の姿にまで至ったのか。巨大な4つの存在としてＣＢＳテレビ、タイム誌、ワシントンポスト紙、ロスアンジェルスタイムズ紙をとりあげ、これらのメディアについてマッカーシズムから筆を起こし、大統領選挙との深い関わりなどインタビューをもとに鋭い分析を加えている。全3巻各400頁余の厚さだが「司馬遼太郎の小説のように」読み易く面白い。

●アメリカジャーナリズム報告、立花隆、文春文庫、1984年、¥340。

日米ジャーナリズムの差をウォーターゲート事件の記者、ワシントンポストの記者などへのインタビューを通して考察している。取材方法、新聞と政治的立場、新聞の過ち等に大きな差がある。アメリカでは報道の自由の原則を守ろうとの強い姿勢をもつのに、日本では言論の自由を憲法で保障されながらも「国家公務員法」に阻まれている。報道の自由こそが民主主義を支えるもので、日本のジャーナリズムはそこに問題があると指摘。

## 放送史・制度

●ドキュメント・放送戦後史Ⅰ～Ⅱ、松田浩、双柿舎、1980～81年、¥2600(Ⅰ)、¥2800(Ⅱ)。

著者は日経新聞の放送担当記者。戦後の放送を当時の関係者からの聞き書きや新聞、社史などの記録から掘り起こし、日本の文化的社会的土壌と民主主義の問題を視野に据えつつ、歴史的に捉え直している。放送民主化運動やアクセス権運動（視聴者運動）については、未刊の最終巻で詳しく紹介される。「放送人に任せておくには余りに重大」との認識に立ち、市民が放送を考え直す機会としたいというのが執筆の動機。

●テレビ視聴の30年、ＮＨＫ放送世論調査所編、日本放送出版協会、1983年、¥2600。

テレビ放送開始の1953年から現在に至るテレビ視聴の実態と、視聴者の意識に関する調査結果をまとめたデータブック。30年の間の調査データを使って、テレビ視聴の変遷を3期に分けて述べ、更に日常生活の中でどう見られているか、人々のテレビ観はどうかを分析。人気ドラマ30選、東京オリンピック等ビック・イベントとテレビ視聴のかかわり等具体的にデータを示す。視聴者層とし子ども、女性、関東・関西の地域差等で視聴傾向を見る。30年目を迎え今後の展望とし、地域と密着したニュース、防災機能、視聴者のアクセス権についての意向調査を掲載。

●放送50年史、日本放送協会（ＮＨＫ）編、日本放送出版協会、1979年、本編、資料篇各¥5500。

大正14年のラジオ放送開始から50年にわたるラジオとテレビの軌跡を克明にたどった報告書。社会文化史の視点にたって激動の時代であった戦前戦後の各時代ごとに放送が社会とどう関わってきたかを知ることが出来る。ラジオからテレビの時代への移り変り、そしてテレビが社会に与えた大きな影響を再認識するためにも資料篇とあわせて1度は目を通しておきたい。本書は各800頁余りのどっしりと重い本だが、普及本（980円）も出ている。

●**放送制度ーその現状と展望1、2、3**、伊藤正巳編、日本放送出版協会、1976〜78年、各¥2500。

科学技術のめざましい発達につれて電波による情報の伝達が劇的な発展をとげている状況の中で放送通信制度は後手にまわり改正が追いつかない状況にある。法的、制度的な側面からの学問的研究を目標に第一線の研究者の参加を求めて"放送"を究めようとの意図で編さんされたのが本書である。放送に少しでも関わりのある立場にいる人は一度は手にとってほしい基本的な本といえよう。

## 人間と現代社会

●**人間復興の経済**、E.F.シューマッハー、斉藤志郎訳、佑学社、1976年、¥1300。

Small is Beautiful が原題。西欧近代化思想の根幹である「巨大主義」と「物質主義」への挑戦の書で①近代世界、②資源、③第三世界、④組織と所有権。金で買えない非物質的価値を尊重する美と健康と永続性の新しい人間生活を復興させるのが将来に対する古い世代の義務であり、「脱近代」への視座の転換と説く。著者は英国石炭公社の元経済顧問の経済評論家。本書は刊行後欧米のジャーナリズム、経済人、政界人に多大な思想的影響を与えた。

●**これからどうする社会とくらし**、使い捨て時代を考える会編、柏樹社、1984年、¥1600。

1973年に関西で発足した同会が10周年を記念して開いたシンポジウムの記録と対談を収めている。槌田劭（金属物理）は高度経済成長の爛熟期に工業社会はゆきづまり、人間の退廃が起こることを予言して運動を始めた。他に寿岳章子、日高六郎、西岡一が発言している。マスメディアが科学技術讃美に終始している中で、社会の平和と暮らしの平和をどうつなげるかを模策している討論は、高度情報化社会における私たちの生き方に大きな示唆を与えている。

●**生命系の危機**、綿貫礼子、アンヴィエル社、1979年、¥1500。

戦後の物質文明の時代の歴史を開く役目を果たしたのは殺虫剤ＤＤＴの広範な使用であった。現代では合成農薬、合成樹脂、合成ゴム、医薬品、洗剤など10万種類にも及ぶ化学合成物質が生産され、これらを人為的に作り出す過程で副産物の廃棄物を作り出している。こうした物質が水俣をはじめ世界各国で環境汚染問題を起こし次の世代に深刻な状況をもたらしている現状への警告の書。

●**ジャンクフード**　A・ファザール、日本消費者連盟編訳、学陽書房、1982年、¥1300。

清涼飲料水、粉ミルク、コーヒー、化学調味料薬品などの中で、有害製品として先進国からしめ出されたジャンク・フード（がらくた食品）が開発途上国において巧妙な販売促進方法で売りこまれている事実や、開発途上国が多国籍企業による危険な廃棄物のダンピングの場となっていることなどを告発し、さらに企業犯罪をストップさせる為の消費者運動を展望している。学生・生徒のための消費者教育のための資料付。

●**戦争中の暮しの記録**、暮しの手帖編、暮しの手帖社、1969年、¥1500。

第２次世界大戦下の人びとの日常がどんなものであったかを東京、大阪、広島など全国各地在住の戦争体験者からの報告で暮しの記録集としてまとめている。報告は庶民の手記、手紙、日記、写真、絵などさまざまで、今まで筆を持ったこともないような人や小学生の手紙、日記などを中心とする。疎開、東京大空襲、大阪全滅、配給食品日記、８月６日、防空壕、飢え、路傍の畑、恥の記録、百姓日記…淡々とした記述の中に戦争の恐しさが浮き彫りにされた貴重な記録といえる。

●**苦海浄土　わが水俣病**、石牟礼道子、講談社文庫、1972年、¥380。

水俣育ちの著者が水俣病患者の悲劇を自分の心の痛みとして書いた小説。昭和28年患者発生以来の病苦、経済的没落、一般市民との孤立による苦悩が描かれている。新日本窒素附属病院細川一博士の報告書、個々の患者のカルテ、新日本窒素工場と患者互助会との見舞金契約書等データも多く、公害病発生から原因追求、患者救済、政治介入の実態が把握できる。著者自身水俣病対策市民会議を結成し、患者の支援運動を続けている。

FCTフォーラム記録 ―― 1985・7・13 於：東京・飯田橋

# NHKはうけていますか？

## ――若者志向!!の公共放送を考える――

報告者　日下部悦子（東京タイムズ記者、NHK記者クラブ所属）小室加代子（評論家）
川竹和夫（東京女子大短期大学教授）

4月の新編成以降のNHKは、ニュースキャスターに若い女性を増やし、深夜帯にも人気タレントのトークショーを作るなど、とくに若者志向を強めたように見える。しかし、公共放送ということを考えたとき、民放に追随し高齢化社会に背を向ける今のNHKの姿勢はどう捉えられるのか？

記者としてNHK広報に毎日接している日下部さん。女性問題などでNHKにも出演し、ルポライターの経験もある小室さん、現職の前に、経済部記者、世論研究所と長年にわたってNHKに在職された川竹さん。これらNHKに縁の深い方々をゲストに迎え、この問題を考えてみることにした。

### コビて作ってもダメ！―日下部さん

それほどヤング向けが増えたわけでもないが、「スタジオL」、「海外ウィークリー」から「ハローワールド」へ、松平、久野木アナウンサーの「7時のニュース」への登用といったように、目立つ形で出たためにヤング志向と言われたのでは。目玉の「スタジオL」が悪評だったことも印象づけた。「ETV8」、「ファミリージャーナル」のように掘り下げた情報、ドキュメントもあるのに若者達を向がクローズアップされたのは、編成にヤングを取り込まなければという“危機感”がNHKにあったから。三月の放送世論調査でも、25～40代のヤングアダルト層のテレビ離れがみられた。「スタジオL」はこの層向けに考えられたもの。では、なぜ失敗したのか？「朝日ジャーナル」の“若者の神々”に出てくるような、民放がさんざん使い古した人たちを司会に起用。ヤング狙い、軽薄短小を中途半端に横目で見て作った。よそで受けているものを連れてくるという発想に立ったとき失敗するという見事な例。NHKらしさというのは、作る人がオリジナリティ、新しさを志向していかないと生き残れない。改編後、ヤング番組は低迷しているものの、全般的には視聴率はアップしている。（ゴールデン1.7％、他1％）「7時のニュース」や「NHK特集」の視聴率が高く、「NC9」に至っては20％を越える日も。本格的に作ったものにヤングがついてきている。コビて作ってもダメということだ。

### 今のNHKは最悪！―小室さん

民放でもNHKでも、女性問題でラジカルな発言をした人たちが干されている。最近のNHKの特徴は、①実用的なもの、②バラエティー化。番組の間に山崩れの危険に関するお知らせをするのは、町内会、隣組的管制組織と同じ。いろいろに応用できるから恐わい。警視庁の爆弾犯人捜査も正当化される危険性もある。実用性の名を借りた警報機関だ。また、作り手の力も落ちてきている。アナウンサーの能力、質の低下をキャラクターで補おうとしている。ドキュメントも少なくなった。「N特」は当りハズレが多い。内部のウワサでは、NHKは職員の人数が膨大な上、高齢化が進み、あぶれ管理職が増加。その解消策として下請け的組織を作るという。キャラクターにおぶさったような作り方は、そのトレーニングともいえる。今のNHKは史上最悪ではないか。ヤング志向でいうと、新雑誌が次々と出るのは団塊の世代を狙ってのこと。彼らは目が肥えてきている。そこをNHKはヨミ違っているのではないか。土曜日朝には、週末情報といって民放と変らないタウン情報のようなものを流す。海外のニュースの強調も、どの程度意味があるのか。公共放送というからには、視聴者がしっかりとチェックしていく必要がある。

## NHK育てるか、それとも殺すか—川竹さん

やはり今のNHKは最悪。いなか(東北)と老人のNHKといわれているのに、その老人を切り捨ててまで若者指向で売ろうとしている。(ビデオリサーチの資料を説明)ヤングの視聴率は過去五年間にわたって落ちている。NHKの迎合主義が年々激しくなってきたのは、韓国を除き世界にその例を見ない「受信料システム」という脆い体質による。外国ではライセンス・フィー(料金)、日本はビュアーズ・フィーだから、見なければ払わないのが当然。現実に不払いが増加しているが、それに対しNHKはただひたすら説得する。今までは一般の無知とオカミ意識(国営イメージ)に支えられて集めてきた。不払い運動がNHKを迎合主義に変えたのだ。外注も進み、外郭団体も増えた。例えばNHKエンタープライズが番組を作り、研修所も独立させて民放などの外部から生徒を集めようとしている。また、視聴者センターの職員も外郭団体NHKサービスセンターからの出向だ。いい年をした元管理職が24時間体制でやっているがこれは無駄。NHKオリジナルのものを作るにはリスクが伴うが、エラーは許されない。そこでことなかれ主義でどんどん萎縮してゆくことになる。職員は会社の中での自由な発言もできない。

放送衛星にかかった600億円の6割はNHKが負担したが、実際利益をあげているのは小笠原と南北大東島だけ。国鉄ではローカル線廃止問題について国民的討議が行われているが、放送衛星についてはなされていない。国鉄合理化と同じように考えるべきだ。税金で運営される放送大学ができて、公共放送はNHKだけではなくなった。制度的競合は大変なものだろう。「受信料制度」が最善なのかどうか。CMをやれば公共性がそこなわれるし、受信料を払わないというのはNHKをつぶせということ。NHKがなくなった時のメディア、テレビ情況はお寒い状態ではないか。NHKをどうやって育てていくかという議論がほしい。教育、教養、報道だけやっていればいいという声には反対。文化、娯楽も他にできないようなものがある。アニメは外注だが、日本製アニメに対する外国の批判もあり、これから健全なものを作っていく必要がある。内部的には政府の干渉はあるが、ニュースを除いて内容にはあまり反映しない。体制よりということはいえるが、政府よりとは違う。そこにNHKに対する誤解がある。それより大衆に迎合し質を落していく方が心配。

### 参加者の方々の質問に答えて

**Q.**(女性) スタジオLの制作者の世代は?

**A.**(日下部/川竹) 女性一人を含み、チーフ・ディレクターは50才近く。NHKで40代は若い方。地方を回されて10何年たってから東京に戻ってくる。

**Q.**(男性) 再放送が多いのは制作費の問題があるためだと思うが、その費用は民放と比較すると?

**A.**(川竹) 再放送は視聴者からの要請で経費節約ではない。費用は、民放には人件費が含まれているので比較できないが、ドラマは同じ位、ドキュメントは3倍位。

**Q.**(男性) NHKは報道、民放は娯楽という役割分担意識が視聴者にあるのでは。

**A.**(小室) 役割論反対。テレビ界全体がテレビでなければできないことを放棄している。

**Q.**(女性)ニュース・キャスターは男性は中年で女性は皆若いのはなぜか?

**A.**(小室/川竹) それこそ迎合主義の際たるもの。女性は地方へ回されないし、タレント性重視。

**Q.**(男性) 民放もマスメディアである以上公共放送だが、NHKがそれを名のるとカン違いが起こる。受信料払う人=スポンサーと思えばどうか。

**A.**(川竹) 100%主義や公共性に過大な期待しない。

**Q.**(大学生の方々) 何も考えないで見られるもの、息抜き的な「笑っていいとも」「いただきます」などをよく見るし、それが話題にもなる。

**Q.**(男性) NHKサービスセンターを通じて、それとなくCMが行われている。かなりの吸い上げ。

**Q.**(男性) ある番組に出演したことがあるが、こちらの発言が前もってシナリオ化され、枠組内で進行するバラエティー番組にはめ込まれていたのには驚いた。

(まとめ 武内恵子)

# FCT データーバンク

## ―― 海　外　篇 ――

●オーストラリア・マスメディア教育会議報告、ATOM Network vol.3、1984年9月。

オーストラリアでメディア教育を担当する教師たちはATOM（Australian Teachers of the Media）という組織を作り、機関誌Networkを発行しているが、その84年9月号で5月に開いた全国会議を誌上録音し、会議の模様を伝えている。それによると、会議で取り上げられたテーマは①子ども、メディア、大衆文化、②スターシステム、③少数民族のメディアにおける扱い、④子どもにメディアをどう教えるか、⑤メディア教育の将来展望、となっている。

オーストラリアでのメディア教育はテレビだけでなく映画、ラジオ、新聞等の活字メディアも含めていること、また映画やビデオの制作、新聞の編集などの実技を重視しているのが特徴である。

●子ども向けメディア教育の雑誌 Young Australian Media News、P.O. Box212、Rozelle、NSW 2039、Australia.

メディア・スタディと呼ぶ新しい教科の導入に力を入れているオーストラリアで1984年5月、8～14才の子どもを読者にするメディア教育のための雑誌「ヤング・オーストラリアン・メディア・ニュース」が創刊された。A4版（29.5×21cm）15pp。発行したのは子ども向け映画の制作会社ヤング・オーストラリアン・フィルム社。内容を創刊号から紹介すると①映画及びビデオ制作のための子ども向けワークショップ、イベントの予定と連絡先情報、②子ども向けTV映画に主演して人気者になっている男女2人の子役インタビュー訪問、③8ミリ映画のつくり方、④アニメーション制作過程の紹介と簡単なアニメ史、⑤質問ページ：映画製作スタッフの役割説明、⑥子ども向けの新作映画及びアニメのレビュー、⑦クロスワードパズル（映画、テレビの制作に関する知識をクイズ方式で理解させる）。

●子どもとテレビの番組様式、Children and the Formal Features of Television：Approaches and Findings of Experimental and Formative Research edited by Marfred Meyar, New York：K G. Sour Verlag, 1983。

本書はアメリカとヨーロッパで発表された子どもとテレビに関する研究の中からテレビが認識力に及ぼす効果と、TVメッセージを理解する上で認識力の発達が果す役割に関する領域のものを集め編集・紹介し、加えてそれら諸研究を番組構成や制作のプロセスに生かす方途を提示している。

子どもとテレビに関する研究は、この10年、内容中心（攻撃的内容が子どもに与える影響、ステレオタイプの影響、広告の影響）から番組様式を中心にするものに変ってきている。その点、本書で紹介される最新のデータは注目に値する。

第1部では次のような研究が紹介されている。まずMedel Rice他のカンサス大研究グループによる番組様式の影響に関するもの。次いでDan Anderson他のMITグループによる研究で、これは子どもの注意力とテレビに対する理解の関係を考察し、16原則を提示するもので、カンサス研究と補足関係をなしている。Aimee Dorr他は番組様式そのものでなく文学を紹介するテレビ番組と視聴する子どもの感情がどう関連しているかを考察し、その研究結果として、子どもの感情のみならず、感情を喚起するテレビ内容の提供も重要であると示唆している。

次にEllen Wartella他はテレビ広告に対する注意力と広告意図の理解に関する研究をレビューした上で、テレビ広告の話法構文の解明を試みそれを広告の理解と説得力に関連させて分析している。

ヨーロッパにおける経験的研究も二つ紹介されている。その一つはスウェーデンのIngegerd Rydinによるもので、テレビ内容に対する子どもの理解力の研究。フランスのPierre Corsetは子どもの生活におけるテレビの役割に関するフランス研究をレビュー。両論文は共に子どもの発達過程を重視するヨーロッパの伝統を示す行動研究である。

第2部は4章から成り、いずれも番組様式の評価と番組企画に認識研究をどう活用するか、その方法について考察している。Edward PalmerによるCTWモデル（サセミストリート、3-2-1 Contact）教育テレビ・エージェンシー（AIT）による学校の閉回路テレビ用番組に関する長期的な研究など。

●ザ・グレートテレビジョンレース―アメリカテレビ産業の歴史― The Great Television Race：A History of the American Television Industry 1925-1941, Joseph H. Udelson, Univ. Ala.：University of Alabama Press, 198

著者は今日の米TV業界のあり方の方向付けは、その歴史の初期段階の混沌とした状況の中で、技術面や組織面において採られた選択によって決定されたと見、米TV産業の構造と方向を決定した選択の時期は1925～41年の間に四段階があったと説く。第一段階は、まず映像を送るということと、それに関する物理的技術的概念の確立期で1873年から一般公開に成功した1925年まで。第二段階はこの新メディアに対する一般の関心を喚起する時期で、技術の未成熟が番組制作上の要求に応えられず、失敗していた時期。第三段階は1930年代初期の技術的発展の速度が早まり企業間の競争が激化し始めた時期。第四段階はテレビ送像技術と

その関連諸設備の開発に始まり技術面での力の均衡をとることに関して、Philco、Dumont、CBSの間の暗闘が繰り広げられ、1941年FCCによって商業的に認可されて、TV界がその前史を閉じるまで。このプロセスを追いながら、米TV業界の体質が、数名の発明家とその業績、そこから生じた特許保護のための企業間の戦略、法的規制の行き届かない商業放送システムの中で大規模化されてゆく私企業、という面に光をあてて検証している。

技術史としては、本書は画期的なものであるし、テレビ業界の構造的体質を決定づけた諸経験が積み重ねられている様と談合によって方向づけがなされていくプロセスを歴史的に明らかにしている。しかし、焦点があまりに狭くしぼられすぎ、著者は、競合メディアの影響、企業的価値、社会・文化的環境等に言及しながらも、それを十分効果的に主題の中で生かしてはいない。本書は、これまで軽視されてきた米テレビ業界の生成期に光を当て、精力的な議論を展開しているが、収集した資料にある事実を十分に公正に使いこなしているとはいえない。しかし、そのことさえも、著者自身の主張とともに、このテーマが更に追求する価値のあるものである、という説得力ともなっている。

●大統領選のテレビ報道：Over the Wire and on TV：CBS and UPI in Campaign '80、Michael J. Robinson and Margaret A. Sheehan, Russel Sage Foundation／Basic Books, 1983。

本書ではテレビと活字メディアが1980年の米大統領選挙を如何に扱ったかが、わかりやすく、活き活きと解説されている。約5,500の大統領選挙関係の記事の内容分析と、多数のマスコミ関係者へのインタビューにより確認して、彼等が作ったニュースに関する意見を取り上げ、さらに、選挙関係のニュースの内容と形成を慎重に分析して、その政治的影響を指摘している。

2人の著者はニュースがどうあるべきかという理念を追求することよりもむしろ、諸メディアがカバーしている環境を現実的に評価してみることを目指している。

●女性とコミュニケーションに関するユネスコレポート1980-1985、Communication in the Service of Women：A Report on Action and Research Programmes 1980-1985, Unesco, 1985。

国際婦人の10年最終年のナイロビ会議に向けて準備、作成された報告書で、国連が全参加国政府に発送し95カ国（1985年1月現在）から回答を得た質問紙調査の結果を中心に、世界各国のコミュニケーション・メディアと女性の関係を過去10年にわたって概観している。同時に、この問題に関するユネスコ主催の会議とその成果の記録も収録している。

国連調査は①コミュニケーション政策、②メディア内容、③メディアにおける女性雇用状況、④オルターナティブ・メディアとネットワーク、⑤女性組織（メディア問題に関する）、⑥国際協力の6領域にわけ、メディアへの女性の平等参加を促進する新たな政策や指針の採択の是否、メディアに描かれる女性に関する調査が行われたかどうか、主要メディア企業の責任ある地位につく女性の数が増加したかどうか、この件に関する調査の有無、過去10年間にフェミニスト雑誌や他の刊行物が新たに発行されたかどうか、発行されている場合、その出版物が女性問題で果している役割、女性問題に関する情報ネットワークがあるかどうか、さらに、女性とメディアを主要な関心事とする女性組織やグループの有無と、それらのグループのメディア・アクセスの可能性等について、具体的な数字による回答を求めている。

回答は国によってまちまちで、具体的な数字や資料名を詳細に記しているところもあれば、イエス・ノウだけを回答した国、また英国はメディアの運営は国から独立した私企業によるという理由で回答を拒否している（日本政府も回答を寄せたという。しかし、本報告書の分析では日本の事情に言及する部分はない。どう回答したのか、知りたいものだ）。

結論として、国連婦人の10年が各国のコミュケーション・メディア領域で女性の地位向上への動きに寄与したことは認められるが、女性の平等参加ということになるとデンマーク、スウェーデン、カナダ、米国等の一部先進国で促進政策が具体化し成果をあげているにすぎない、と総括している。

メディアや政府側の動きの鈍さと対照的に、女性とメディアに関する研究はこの10年で目ざましい展開をみせた。欧米諸国のみならず第三世界でも数多くの研究がみられるとして、80～85年の間に行われた研究をレビューしている。

目次：①女性の地位とコミュニケーションの役割、②女性とコミュニケーションに関するユネスコ計画、③ナイロビ会議へ向けた各国政府アンケート調査、④女性とコミュニケーションに関する行動と研究、⑤参考文献。

（レビュー　宮下浩子、鈴木みどり）

子どものテレビの会（FCT）はテレビの送り手と受け手と研究者が立場を超えて集い、より良いテレビの実現をめざし実証的研究と実践活動を積み重ねていくためのひろば＝フォーラムとして、1977年10月に創設されました。その運営は、創設以来、事務局スタッフのボランティアと全国の会員からの会費と拠出金、定例のFCTフォーラム（研究会）参加費、及び、調査研究報告等のFCTオリジナル出版物販布からの収入により行なわれています。
ガゼット（Gazette）の年間講読のお申し込み、バックナンバーのお問い合わせは事務局へハガキか電話（03・721・8694）でどうぞ。